

二〇一六年度 洛星中学校入学試験 (国語) 【前期日程】

※ 問題は冊子形式で、全部で20ページあります。

※ 解答用紙は問題冊子の中にはさんであります。

※ 解答は欄らんをはみ出して書いてはいけません。

※ 字数の制限がある場合、句読点は一字として数えます。

【一】 次の文章は『武士の子』（赤川 武助 作）という小説です。よく読んで後の問いに答えなさい。

ふと、小屋の外の落ち葉をふんで、ちかづいてくる人の足音がしたように思った。新介は、おりかけた枯れ枝を膝にあてたまま、じつと耳をすました。

だが、何もきこえはしない。あけはなつた小屋の戸の外には、朝の日がうらかにさしている。すぐまわいの山の木の葉の一枚一枚が、水のような山気の中に、ひっそりとしずまりかえって見えているだけだった。やっぱり、そら耳だつたにちがいない。里とおいこの山奥へ、めつたにたずねてくる人などいないはずだ。

新介は、Aと枯れ枝をおつて、かまどの下へたきつけた。

（飯ができれば、まずお父つあんにそなえよう。栗飯がすきだつたからなあ）

ごはんたきは、いつも新介の役目だった。ごはんのできるあいだ、父があそこの板じきにすわつて、しらがをB光らせながら、猟銃の手入れなどをしていた姿を、新介はこのごろご飯をたくたびに思いだすのである。だが、その父は、もういないのだ。板じきの上にはだれもすわつてはいない。――

新介は、小声で暗誦をはじめた。

「一つ。武士は、忠義第一と心がけよ。」

父からおそわつた「武士道五訓」だ。新介は父のことを思いだしてさびしくなったりするときは、これを暗誦することになっている。

「二つ。武士は、礼儀を正しくせよ。」

「三つ。武士は、なにごとにも強くあれ。」

①いつもこの五訓を口にする、元気がでてくる。新介の声はしだいに高くなった。

「四つ。武士は――」

ガサツ！

また、音がした。こんどは小屋のすぐ外だ。たしかになにかがそこへきているにちがいない。

「四つ。武士は、人との約束は命にかけて守るべし。」

新介は立ち上がった。そして戸口からなにげなくCと外をのぞいてみた。

「あ！」

とつぜん、新介は②はじかれたように、うしろへ飛びさがった。

山の熊めが、腹をすかしてときどき小屋のまわりをうろつくことがある。そんなときでも、新介はこれほど驚いたことはなかった。

かれの目の前に、髪ふりみだした一人の鎧武者が、ぬきみの太刀をつえについて、立っているではないか。

新介は、一瞬、われとわが目をうたがった。だが、けつして夢ではない。鎧武者は、D光る目で、まともに新介の顔を見つめながら、小屋の中へ一足はいつてきたのだ。

ハツとして、新介はまたあとじさつた。つぎの瞬間、鎧武者がとびかかってくると思った。

だが、そうではなかった。いがいにも鎧武者は、うめくようなよわよわしい声で、よびかけたのである。

「子ども！」

新介は石のようになったまま、だまつていた。

「飯はないか？」

「……………」

「飯を食わしてくれ。わしは、腹がへっているのだ。」

――（以下、中略）――

新介は落ち武者と会話をかわし、自分に危害を加えることはないことを感じる。倒れ込み、眠ってしまった武者の姿を見ていると、今は亡き父とおなじような年格好に感じられる。新介はその姿を見ていると、亡き父が語ってくれたいくさの事などが思い出されるのであった。やがて目をさました武者に新介は父に供えるはずだった栗飯を食わせる。武者は夢中で食らいついた。やがて武者の口から、自分が織田信長の軍勢に追われ美濃国に逃れようとしていることが告げられる。新介は美濃国にいたる道を教え、また絶対に口外しないことを武者と約束する。

落ち武者を見おくつて、小屋の屋根の見える庭までかえつてきたとき、新介はハッとして立ちどまった。鎧だかかぶとだかの金具が日に光ったのが見え、もう追っ手は小屋のあたりまでおし迫っているようだ。口々になにかいう声もきこえる。

なんととはなしに③新介は、しまった、と思った。

ふいに、すぐちかくで声がしたかとおもうと、目の前へ四、五人の鎧武者があらわれた。

とつさに新介は鉄砲をかまえた。

鎧武者たちは、ギョッとしたらしかった。立ちどまって、ちよつとのあいだにらみ合ったが、先頭に立った武者の一人が、なにか鋭くさけんで、いきなり新介にとびかかろうとする氣勢を見せた。そのとき、新介の指は引き金にかかっていた。

だあん！

轟音がとどろき、山岸につき出ていた木の枝から、黄ばんだ葉が二、三枚パツととびちった。

つぎの瞬間、新介は鉄砲をたたき落とされ、地にねじふせられていた。

「ふといやつ！」

肩や背中^{かた}に二つ三ついたみをおぼえ、手はうしろざまにしばりあげられた。

小屋の前の地べたへ、新介はひきすえられた。目の前に、りっぱな鎧をつけた大将らしい武者が立っていた。眉のあいだのけわしくせまった、ただけしい顔つきの男だ。手に青竹を一本にぎっている。

「これ、わっぱ！ 落ち武者を、どこへかくした！」

いきなりそういった。

「まっすぐにいわぬとためにならぬぞ。いえ！」

「そんな者はしりませぬ。」

こたえると同時に、大将の額に青いすじが、むくむくとふくれあがるのを新介は見た。

「だまれ、こやつ！」

きもにひびくような大喝だった。

「小屋の中に、血のついた鎧下の袖がおちていたのじゃ。しらぬとはいわさぬぞ！」

新介は唇をかんだ。

「いえ！ いわねば斬る！」

「しらぬ！」

「うぬ。しぶといやつ！ この信長を、たばかる気か！」

新介はハッとした。これが、話にきいていた織田信長か！

鎧のすれあう重い音がして、二、三人かけてきた武者が、そこへ片膝ついた。

「殿、このあたりくまなくさがしましたが――」

「見つからぬともうすのか？」

「は。どこへもぐりこみましたか……」

「この、うつけ者！」

信長がさけんで、ピシツとはげしく青竹で地をたたいた。竹の先は、ささらのようにわれた。

「袖の血が、まだ生々しいわ。おらぬはずがあるか！ さがせ。草の根わけてもさがしだせ！」

「は！」

武士たちが立ちあがると、信長はすぐ新介の方へむきなおった。青竹をにぎった信長の手がふるえている。

斬られる！ と思った。と、どうしたのか、生まれてからまだ経験したことなかったほどの恐ろしさが、ふと腹の底からわきあがつてきた。これではならぬ、と④新介は齒をくいしばった。

かたわらにひかえていた武者の一人が、信長の耳に口をよせて、なにかささやいた。「ふむ、ふむ。」と、信長はうなずきながら、きいていたが、

「これ、わつぱ！」といった。

意外にもその声の調子はおだやかになっていた。

「おまえ、どうしてもいえぬか？」

「いえぬ！」

「なに、いえぬ？ ではやつぱり、しつてはいても、いえぬと申すのだな。」

「………」 — a

「だがのう、かんがえてみる。手負いの落ち武者はとおくへゆけはせぬ。わしには手の者がおおぜいいる。わしは思ったことをやりとげなかったことのない男だぞ。」

「………」 — b

「おまえが、いかな強情はりおつても、きつとこつちの手で落ち武者をとらえてみせる。その時こそ、おまえがどんな目にあうか、わかつておろうのう。」

「………」 — c

「むだじゃ。むだじゃ。すこしばかりよいいなで、まをとらすだけじゃ。そのようなことをせず、今おまえがすなおに落ち武者の居所をおしえたら、おまえの命はもちろんのこと、わしは落ち武者の命まで助けてやろうと思っておるにのう。」

新介はハツとして信長の顔を見上げた。信長は微笑していた。

「いやいや、それだけではない。おまえがかくさずいいさえすれば、のぞみのものをなんでも、ほうびにとらせよう。黄金がほしければ、黄金五十枚——」

「………」 — d

「馬がほしければ、あの馬。名馬じゃぞ。」

新介ははじめて気がついたのだが、小屋の横の立ち木に、みごとにふとった馬が二頭、しだの葉を食んでいた。

「太刀がよければ、それこの太刀をやるう。」

腰にはいていたりつばな太刀の柄頭を、トンとたたいた。黄金づくりの太刀だった。

「いうてみい。おまえがのぞみのものを。——落ち武者の命も助けてやる。おまえのいましめをといて自由にしやる。その上、黄金でも馬でも太刀でも、なんでも思いのままに、とらそうというのじゃ。」

⑤新介は急にしぼりあげられた腕のいたみを感じだした。綱が手首にくいこみそうだった。頭がクラクラした。（そうか。落ち武者の命を助けてくれるのか。落ち武者が助かるのなら——）

そして、ふとこの時新介の心に、ある考えがうかんだのである。

いまごろあの落ち武者は、もうおおかみ谷の森の中へはいっているじぶんだ。あそこへはいりさえすれば、山になれぬこの武者たちに、なかなか探しだせるものではない。とすると、自分がゆくえをいつてしまったとて、あの落ち武者へのもうしわけは立つ。その上、わしはこのりっぱな大将からほめられよう。かずかずのみごとなほうび物を手にすることもできるのだ。――

「ためらわずにいつてみる！ 落ち武者はどこへいった？」

信長の声が、頭の上からのしかかるようにきこえた。

「太刀や黄金をもらうのがよいか？ それとも命をすてたいか？」

「たつた一言だ！」

そうだ！ たつたの一言だ。落ち武者は炭がまの後ろの森へいった、とそれだけいえばよいのだ。

信長の腰の太刀のかがやきが、ピカピカと新介の目にまぶしかった。そつと目をそらすと、ふとつた二頭の馬が見えた。新介は息苦しくなった。額からタラタラと汗^{あせ}がながれ、胸のどうきが、自分でかぞえられるほど高まってきた。

（おまえは縁^{えん}もゆかりもない落ち武者の身がわりに、たいせつな自分の命をすてたいのか、このおろか者！）

頭の中のどこかで、そうさげんだ。

（とれ、あの太刀を、馬を、黄金を！ おまえはほんとうはほしいのだろう！）

新介は、おもわず膝をうかせて信長の顔を見た。息ぐるしきにもうたえられそうもなかった。

（ええもう、いいます！ あの落ち武者のいる所をいいます！）

新介はそうさげぼうとした。

だが、その刹那！ ⑥電光のように新介の心にひらめいたものがあつた。頭から水をあびたように、一瞬サツと寒気が全身をはしつた。父の顔が、チラと目の前に見えたような気がしたのである。

（新介！ おまえは武士五訓をわすれたか！）

新介は、ガタガタとふるえた。

「わしは――」思わずそうつぶやいて、グツとつばをのんだ。

信長が、からだをのりだした。

「おう、いうか。かしこいやつだ。よくきわけた。」

だが、新介は、ふるえながらも、心がしだいに平静になってくるのを感じていた。

（わしは、とんでもないことをするところだった。たとえ、落ち武者は助かるにしても、一度約束したことを、命にかけても、たがえてはならぬはずではなかったか！ 太刀や馬など、なにするものぞ！）

ホツとふかい吐息^{といき}さえ出てくるのだ。

「これ、はやく申せ！」

新介は、しずかに信長の顔を見つめた。

「わしは、いえませぬ！ いわぬとあの落ち武者に約束をしました。人との約束をたがえる者は武士でないと、父も申しました。わしはいえませぬ！」

ハッキリとおちついた声だった。

そのとき、⑦いつさいの物音はハタとたえたようにおもわれた。シーンとあたりは緊張^{きんちやう}した。

「なに、いえぬ！ そうか、もう一度もうしてみよ！」

「いえませぬ！」

「この、強情者！」

信長の手が、太刀の柄頭のほうへ、つとうごいたような気がした。

こんどこそと、新介は観念した。

(だが、斬るなら斬れ！ 武士として、りっぱに斬られるのだ！)

信長は、きゆうにさっきなにかをささやいた家来の方へふりむいた。

「藤吉郎！ 軍配は、どっちへ、上げるのう？」

すると、藤吉郎とよばれた武者が、

「⑧負けも負け、殿の大負けでござりますよ。大軍相手の合戦には大勝利の殿が、このちっぽけなわっぱに、手ものうお負けなされたことは、いやはや、おみごと、おみごと。はっはっはっはっは。」

さもおもしろそうに笑いだしたのである。

「なにをもうす。⑨智者ちえ者のそちのさずけた戦術が、みごとに破れたのではないか。ふ、ふ、ふ、ふ。」

信長も笑った。

どうしたというのだろうか？ 新介はただあつけにとられるばかりだ。

「では、わしはいさぎよく退陣たいじんすべきかな。」

「御意！」

「馬引け！」信長がさけんだ。

そこへ、さつき搜索さうさくにでた家来が、おずおずと、もどつてきた。

「殿！ 面目めんもくござりませぬ。」とうなだれた。

「おぬしらは、いままでさがしておったのか？」

「は。」

「たわけめ！ いつまでもこの辺にぐずぐずしておる落ち武者があるものか！」

信長は、そのとき引かれてきた馬にまたがりながら、

「おぬしらが、山の中をのたのたしておるあいだに、こっちでは一合戦ひとかつせんよ。しかも、それが負けじゃ。は、は、は、は。」

そして、馬の上でキツとなると、さざらになった青竹を、ビュツと振ふった。

「藤吉郎、しんがりせよ。」

「は。して、このわっぱは？」

「おぬしに、まかせる！」

いいすてて、軍兵を前後にしたがえ、せまい坂道をたくみに馬をうたせながらくだつていった。

その信長の後ろ姿を、⑩ボンヤリ見おくつていた新介は、きゆうに両手が自由になったのを感じた。ハツとすると、藤吉郎が刀をさやにおさめながら、新介の前に立つて微笑していた。

「これ！ あっぱれなやつよのう、きさまは！」

「……………」

「殿はああはいわれたが、もしきさまが口を割りでもしていたら、落ち武者はもとより、きさまもバツサリだったとこだぞ！ すこし気は短いが義に固いきしやう気性じゃ。殿も感心されたいよ。」

「……………」

「わっぱ！ 武士になる気はないか？」

「……………」

「あれば、推挙してつかわずぞ。山の中へおくのはおいしいものじゃて。その面魂つらたましい、かならずものになる。」

藤吉郎は馬の方へ歩いていき、自分でたづなをといて、むぞうさにまたがった。

「ともあれ、⑪里へでたら、わしがもとへたずねてこい。なにかと力になってやろうぞ。わしは木下藤吉郎きのしたじゃ。」
馬上から人なつこそうな微笑をのこして、藤吉郎は坂道のほうへ馬をむけた。

その姿が見えなくなつてからも、新介は、しばらくのあいだじつとすわっていた。
やがてきゆうに新介は立ち上がると、父のお墓のある高みのほうへ、まっしぐらにかけ登つていった。
一息に登りつめると、まず落ち武者の去つたおおかみ谷のほうを見た。それから軍勢の去つたほうをながめた。
どこにももうなに一つ動くものの影は見えなかった。

見わたす山々も、谷々も、なにごともしなかつたような姿で、いつものようにヒッソリとしずまりかえっていた。
新介は、お墓の前へひざまずいた。

「お父つあん。」と新介はいった。

「⑫わしのしたことは、あれでよかつたんだろうね。武士の道にかなっているだろうね。」

父が、にこにこしながら、お墓の下からなにか答えてくれそうな気がした。

新介は大きな声で、武士道五訓を暗誦しだした。

「一つ。武士は……」

なんだか気持ちがうきうきしていた。

問一 本文6行目から28行目までの空欄AからDに入る言葉として最も適当なものを次のア

イカの中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号は二度以上は使えません。)

ア. チカチカ イ. チョロチョロ ウ. フワリ エ. パチパチ オ. ヒョイ カ. ギラギラ

問二 本文からわかる新介の生活はどのようなものだと考えられますか。適当なものを次のアイウオの中か

ら二つ選んで、記号で答えなさい。(ただし、解答の順序は問いません。)

ア. 新介は村の中で一人暮らしをしている。

イ. 新介は父と二人暮らしだったが、今は死別している。

ウ. 新介は今人里離れた山奥に一人で暮らししている。

エ. 新介は父親亡き後、母親と二人暮らしをしている。

オ. 新介は父親と二人で暮らししているが、父は村へ出かせぎに行っている。

問三

本文17行目に傍線部①「いつもこの五訓を口にすると、元気がでてくる」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 父が残してくれた五訓を声に出すと、父が身近なところにいるように感じられるから。
- イ. 弱気になることは父の教えに反しており、五訓を暗誦して強い男になろうと思うから。
- ウ. 五訓を口にすると、父の姿が目の前に現れて自分をきびしく教えさそうとするから。
- エ. 父がなりたかった武士になるために、五訓を大切に覚えようという気持ちになるから。

問四

本文24行目に傍線部②「はじかれたように、うしろへ飛びさがった」とありますが、これは新介のどのような様子をあらわしていますか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 驚きと期待が大きくて体がじっとしてられない様子。
- イ. 恐怖のあまりに体全体がこわばって動かないでいる様子。
- ウ. 父以外の他人に会えた喜びがかくせないでいる様子。
- エ. 驚きと恐怖に支配されて体が反射的に動いている様子。

問五

本文51行目に傍線部③「新介は、しまった、と思った」とありますが、このときの新介の気持ちの説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 落ち武者と追っ手から逃げる手段を話し合うべきだった。しかし、食べ物を与えたり休ませたりすることしか考えていなかったことを後悔している。
- イ. 落ち武者と父とを重ね合わせて親切に栗飯を食わせてやった。しかし、追っ手のことを考えれば、早く逃がしてやるべきだったとあせっている。
- ウ. 落ち武者を助けることで武士道を発揮することができたと思った。しかし、追っ手が近づいたことに動揺している自分をふり返ると情けなく思う。
- エ. 落ち武者の話を知っているときは気持ちが高ぶっていた。しかし、信長が追っていることを思い出し、自分の身を守ることを必死で考えている。

問六

本文88行目に傍線部④「新介は歯をくいしばった」とありますが、なぜですか。その理由を五十字以内で説明しなさい。

問七

本文 96 行目から 109 行目までの会話について、㉑㉒の「……………」は新介が言葉を発していないことを意味しますが、新介のさまざまな心情がうかがえる箇所とも考えられます。㉑㉒の「……………」では新介の心情はどのようなものだと考えられますか。最も適当なものを次のア㉑キの中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

- ア. 落ち武者だけでなく自分の命の危険も感じて不安になっている。
- イ. 落ち武者よりも自分が助かりたくて精一杯になっている。
- ウ. 考えもしなかった信長の提案に少しとまどっている。
- エ. 父親との約束を守ることができたと安心している。
- オ. 落ち武者のことは決して口外しないと固く決心している。
- カ. 自分のことを親身になって考える信長を心から尊敬している。
- キ. 信長の強い態度を前にして自分の決心がゆらいでいる。

問八

本文 116 行目に傍線部㉑「新介は急にしばらくあげられた腕のいたみを感じだした。綱が手首にくいこみそうだった。頭がクラクラした」とありますが、なぜですか。その理由を説明しなさい。

問九

本文 137 行目に傍線部㉑「電光のように新介の心にひらめいたものがあつた」とありますが、どういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問十

本文 154 行目に傍線部㉑「いっさいの物音はハタとたえたようにおもわれた」とありますが、これはどのような様子をあらわしていますか。最も適当なものを次のア㉑エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 信長に対してびくびくしていた少年が、急に落ちついて受け答えたことに周囲の者はおどろき、命を粗末にするおろかな新介を心の中ではあざ笑っている様子。
- イ. 信長自身が少年の言葉におどろいて、この少年をどのようにこらしめようかと考えをめぐらしており、周囲の者はその邪魔をしないように静かにしている様子。
- ウ. 信長の迫力は周囲の者を圧倒的に支配するだけではなく、周囲の雰囲気もふくめて、いっさいのものをこおりつかせてしまうような影響をあたえている様子。
- エ. 信長の言うことを聞こうとしない少年の態度を、周囲の者は意外に思い、そのことが全く信じられずにこの後のなりゆきをかたずをのんで見守っている様子。

問十一 本文164行目に傍線部⑧「負けも負け、殿の大負けでござりますよ」とありますが、藤吉郎のこの発言にこめられた意味を説明したものととして最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 自分たちの予想に反した新介の姿を見た藤吉郎は、死を覚悟してまで落ち武者の居場所を白状することがない新介の武士としての心意気を認め、高く評価している。

イ. 新介に激怒する信長を冷静に見ていた藤吉郎は、新介をあわれに感じ助けたいという思いから、信長に暴言を吐くことで彼の怒りを自分に向けようとしている。

ウ. 必ず殺されると思い込んでいる新介を見た藤吉郎は、ここで助けてやれば彼は我々に忠義をつくす家来になるはずと計算し、新介に恩を感じさせようとしている。

エ. 新介が信長よりもはるかに武士として優れていることを見抜いた藤吉郎は、新介こそ武士であることを信長に教えるために彼の負けをはっきりと伝えている。

問十二 本文167行目に傍線部⑨「智者のそちのさずけた戦術」とありますが、これは藤吉郎が「人間」というものをどのような生きものと考えた戦術なのか。藤吉郎の考える「人間」というものを五十字以内で説明しなさい。

問十三 本文186行目に傍線部⑩「ボンヤリ見おくっていた新介は」とありますが、このときの新介の様子を説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 今まさに自分は殺されると腹をくくった新介だが、藤吉郎の自分たちの負けだという発言を受け、あつさりとその場を引き上げていく信長を見て、新介は自分がどうしてよいのかわからないものの、信長の背中に武将としての器量の大きさを感じている。

イ. 信長によって極限にまで追いつめられていた新介は、突然、信長が負けを認め、すみやかにその場を去って行く彼の後ろ姿を見て、信長の圧力から解放されたと感じるものの、自分が置かれている状況がうまくのみこめず、不思議に感じている。

ウ. 結局、信長を怒らせてしまい「もはやこれまで」と思った新介であったが、信長が急に追究をあきらめ新介の前から去ったとたん、自分は助かったんだと思い、信長の背中をずっとながめながら、彼に命を助けてくれた感謝の思いを感じている。

エ. 信長の圧倒的な存在感に死を覚悟した新介だが、信長がいきなり落ち武者を探すことをやめ、足早に新介から遠ざかっていく後ろ姿を見て、あれがさつきまで自分を苦しめていた信長なのかと、その変わりぶりに何とも言えない不安を感じている。

問十四 本文197行目に傍線部⑪「里へでたら、わしがもとへたずねてこい。なにかと力になってやろうぞ」とありますが、藤吉郎は新介にどんなことを伝えようとしているのですか。三十字以内で説明しなさい。

問十五 本文206行目に傍線部⑫「わしのしたことは、あれでよかったんだろうね。武士の道にかなっているだろうね」とありますが、このときの新介の思いを説明しなさい。

問十六 信長はどのような人物としてえがかれていますか。本文の内容をふまえて説明しなさい。

【二】 次の①～⑩の傍線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

- ① 彼のノートをハイシヤクする。
- ② 物事を始めるキウンにめぐまれる。
- ③ ジョウセキどおりのやり方がうまくいく。
- ④ 彼はゲンミツに物事を考える。
- ⑤ コウチンをいただくほどの仕事ではない。
- ⑥ 明日は君の行きたい場所でトウシユクしよう。
- ⑦ 式典ではブッコ者の名前が読み上げられた。
- ⑧ 職人のエンジユクした技術にほれぼれする。
- ⑨ 朝礼はいつも二列ジュウタイでならぶ。
- ⑩ 気になっているアンケンを先にかたづけよう。

問題は以上です。

問

問

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問
十
二

問
十
三

問十四

問十五

問十六

【一】

※ 評 点

受験番号氏名